

宮崎市立生目台東小学校の学力向上への取組

1 学校の概要

宮崎市の西部にある生目台団地に昭和62年に開校し、今年で19年目を迎える。現在、児童数510名の中規模校である。地域は、教育に対して関心が高く協力的である。平成17年度から宮崎市の国際理解教育(英語活動)の研究指定校となり、日々研究に取り組んでいる。

2 児童生徒の実態

学力検査(県学力検査及びCRT)の結果から

国語科の実態

	3年	4年	5年
市内平均	70.3	75.0	69.1
事務所平均	70.2		68.8
県内平均	69.9		68.4
全国平均		74.8	
本校平均	68.2	71.7	74.7

第5学年の国語科では、他の平均に比べても高いものがある。特に宮崎市内では、第2位の成績を修めている。領域別に見ても話すこと聞くこと、書くこと、言語事項のバランスがとれている。しかし、第3、4学年の国語は、他の平均をわずかに下回っており、領域別に見てもコミュニケーション能力の育成が望まれる。

算数科の実態

	3年	4年	5年
市内平均	77.7	75.5	73.6
事務所平均	77.6		74.0
県内平均	77.3		72.9
全国平均		75.2	
本校平均	76.4	73.0	74.7

第5学年の算数科では、他の平均と比べても同じ程度もしくは、それを上回る程度の成績を修めている。第3、4学年においては、他の平均をわずかに下回っており、特に数量関係の育成が望まれる。

3 学力向上に向けた経営方針

本校では、学校の教育的課題の第1番目に「学習指導の充実(学力向上)」を挙げている。具体的には、次の点に重点を置いて取り組んでいる。

- ① 学習形態やチャレンジタイムを工夫した基礎的・基本的な事項の指導の充実
- ② 学習手順や学び方を習得させる問題解決的な学習による主体的な学習習慣の育成

これらを具現化するために、CRT検査や県学力検査で、国語科と算数科において全国平均を2～3ポイント上回ることを、漢字や四則演算について児童全体の80%が達成できるようにすること、かけ算九九の完全に習得させることなどを学校の数値目標に掲げ、日々の授業改善や教育課程外での実践、家庭・地域との連携等を通して、その達成を目指している。

4 教育課程内の取組

(1) 国語科における学力向上の手立てについて

本校では、平成15年度から16年度にかけ、「ことばを通して自ら考える児童を育成するための国語科学習指導法の研究」を研究主題に掲げ、国語科の学習指導法の改善に努めてきた。具体的には、次のとおりである。

① 研究の視点

ア 研究の視点1

○ ことばを通して考える児童を育成する手立て

- ・ 説明文教材における学習過程の工夫
- ・ 文章を的確に読み取るための指導の工夫
- ・ 指導に生きる評価の工夫

イ 研究の視点2

○ 言語感覚を磨くための手立て

- ・ 習得した言語を日常の表現活動に生かすための手立て(チャレンジタイムの実践等)
- ・ 言語環境の整備充実
- ・ 言語事項の基礎・基本の習得を図る日常指導の工夫

② 研究の実際

ア 説明文教材における学習過程の工夫

児童が単元での学習内容を把握し、また学習の計画を立てる活動に取り組むことで、主体的な学習への取組ができると考えた。

右の写真は、第5学年「森林のおくりもの」において、児童一人一人が課題を見付け、それらを整理することで読みの視点を明確にするようにしたものである。



イ 文章を的確に読み取らせるための指導の工夫について

的確に読み取るためには、一人一人の児童が言葉の意味を考えながら注意深く読み取ることが必要である。また、書かれていることについて、必要な情報を視覚的にもとらえさせることで、読み取った内容を確認なものにできると考えた。

読み調べの段階においてサイドラインを引かせることは、文章を的確に読み取らせるためには、有効な手段である。しかし、サイドラインの引き方が分からないとそのよさを生かすことは難しい。そこで、サイドラインを引くところを焦点化し、線の引き方を具体的に示すことにより文章を的確に読み取ることができると考え、実践した。また、説明文に限らず、物語文等の読み調べの段階においてサイドラインを取り入れる(日常化)ことで、より効果的になる。

次に示すのは、学年の発達段階に応じたサイドラインの引き方である。

学年部	主 な 方 法			
低	○ 学習問題や目的に応じて、大切な部分に直線を引く。			
中	○ 学習問題や目的に応じて、大切な言葉や文に線を引く。 ・ 登場人物などの行動（したこと）は ————— ・ 行動以外の会話文、様子を表す言葉や説明は ~~~~~			
高	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center; vertical-align: top;"> 【物語文】 ○ ポイントになる言葉は ○ 登場人物の様子は ————— ○ 登場人物の心情は ~~~~~ </td> <td style="width: 5%; text-align: center; vertical-align: middle;">}</td> <td style="width: 45%; text-align: center; vertical-align: top;"> 【説明文】 ○ 筆者の考えは ————— ○ 要点は ============== </td> </tr> </table>	【物語文】 ○ ポイントになる言葉は ○ 登場人物の様子は ————— ○ 登場人物の心情は ~~~~~	}	【説明文】 ○ 筆者の考えは ————— ○ 要点は ==============
【物語文】 ○ ポイントになる言葉は ○ 登場人物の様子は ————— ○ 登場人物の心情は ~~~~~	}	【説明文】 ○ 筆者の考えは ————— ○ 要点は ==============		

ウ 指導に生きる評価の工夫について

評価規準を明確にするとともに、評価規準に達していない児童に対する具体的な手立てを示すことで、指導と評価の一体化を図る。次の例は、第6学年の説明文「文章の構成を考えながら（宇宙からツルを追う）」を指導したときのものである。

『読み取り』における評価規準と手立て

次	時	評価規準（評価方法）	達成していない児童への手立て
1	1	渡りの調査方法の仕組みについて順を追ってワークシートにまとめることができる。（ワークシート）	ツル情報を伝えるために必要な機器・それが設置している場所を示す言葉を共に探し、サイドラインを引かせる。
	2	イズミ親子の渡りの様子を地図上にまとめることができる。（ワークシート）	イズミ親子が立ち寄った場所にサイドラインが引けているか確認し、順を追って地図上に書き込む作業をともに行う。
	3	サクラ親子の渡りの様子を地図上にまとめることができる。（ワークシート）	サクラ親子が立ち寄った場所にサイドラインが引けているか確認し、順を追って地図上に書き込む作業をともに行う。

(2) 算数科における学力向上の手立てについて

① 少人数指導による指導体制の充実

「2 児童生徒の実態」でも記述したように、特に中学年段階において指導体制の工夫・改善が求められている。そこで平成17年度から、5・6年に加え3・4年においても少人数指導担当を加配し、学力向上に努めている。このことにより、少人数指導担当を中心として、適宜、学年部間（中・高学年）の算数科学習指導における連携が図られるようになってきている。

② 学習形態やグループ編成の工夫

習熟度別学習を基本とした上で、例えば、単元導入の課題設定では多様な考えを引き出すために等質編成にする等、学習内容に応じた弾力的な形態や編成を実施している。

5 教育課程外の実践

研究の視点2に関連して、児童の言語感覚を磨くために、教育課程外において次のような取組を行った。

(1) 習得した言語を日常の表現活動に生かすための手立て（チャレンジタイムの実践等）

毎週水曜日の朝8時10分から8時25分までの15分間をチャレンジタイムとして、児童の学力向上を図るための時間として特設している。特に、完全習得を目指して指導法を工夫し、教師が直接指導する時間としている。取組の主な内容は次のとおりである。

- 漢字先生
児童が新出漢字について調べたものを発表する。
- 漢字辞典を使う
漢字辞典で調べた漢字を使ったクイズに出す。
- 漢字ビンゴ
新出漢字を使ったビンゴゲームをする。
- 漢字を使った文づくり
習った漢字を4～5文字使って短文をつくる。



(2) 言語事項の基礎・基本の習得を図る日常指導の工夫

日常の学校生活の中に、言語活動を取り入れ、言葉を適切に使う機会を設定することで、児童の言語感覚を育てようと考えた。具体的には次のような言語活動を実践した。

- ・ 朝の読書活動
- ・ 1分間スピーチ
- ・ 漢字の筆順を、朝の会や帰りの会で復習する。
- ・ 日記を書くときに使った漢字の数を書く欄を設ける。

6 保護者・家庭、地域との連携

保護者や家庭、地域と連携を図ることは、児童の学力を向上させる有効な手立ての一つであると考えられる。そこで本校においては、家庭学習を充実させるために、学年の発達段階に応じた「家庭学習の手引き」を作成し、学校での学習を補完するとともに、その深化を図った。

7 成果と課題（次年度の実践を含む）

(1) 成果

- ① サイドラインの引き方を具体的に示したことで、文章の読み取りが確かになってきた。特に第5学年において、宮崎市内で第2位になるなど、その効果が顕著に現れてきた。
- ② 指導に生きる評価計画を立てて授業に臨むことにより、児童の学習状況を把握した上で効果的な指導を行うことが可能になってきた。
- ③ 算数科においては、少人数指導など、指導方法の工夫・改善により、個々の学力向上が見え始めている。

(2) 課題

- ① 問題解決的な学習を今以上に推進するなど、日々の授業を見直す。
- ② ことばを通じた表現力の育成に努めるとともに、本年度の研究主題であるコミュニケーション能力の育成に努める。
- ③ チャレンジタイムを漢字の習得に限らず、算数の基礎・基本の定着を図るための時間としても活用する方法を研究する。